

は し が き

先に『マンスフィールド・パーク』第一巻～第三巻の研究を公けにしてから予想外の年月が経ってしまったが、この『エマ』第一巻もまた先の研究に次ぐ一連の研究の一環である。先の場合と同様に、これもまたわれわれジェイン・オースティン研究会のメンバーによる輪読会を基礎として、その成果を整理したものである。ついでにそのメンバーの名を記しておく、途中で多少の変動が見られたが、最後まで一貫して作業に参加したのは Antony Stephen Gibbs, 坂本武、島崎守、多田敏男、谷口義朗、樋口欣三らの諸氏である。

「注」が一見したところ膨大な量になったのは、メンバーがいろんな角度から提示するところの意を汲んで、できるかぎりそれらを採用しようとしたからである。唯残念なことは、違った個所に関係付けるクロス・レファレンスを、紙数の関係で割愛しなければならなかったことである。それらの事項が作品の総合的な理解に極めて必要なことは勿論だが、この作品の第三巻の研究が完結した時に一括して「索引」で処理するよう問題を先送りしただけのことである。

この種の研究の第一の狙いは、『マンスフィールド・パーク』第一巻の「はしがき」にも明記されているように、「オースティン時代の、そしてできればオースティン自身の感覚に、なるだけ近づくように努力して、原典を読むこと」であることは論を俟たない。それにしても作業の途上でオースティンからの引用が OED に数多く散見されたことに一同は改めて驚かされ、この種の地味な基礎研究

がいかに大切であるかを思い知らされるのであった。

エマは「作者以外には余り好かれることのないだろうヒロイン」と作者オースティンは言っているが、確かに彼女は、言うなれば「自惚れの強い」性格であることは否めないだろう。にもかかわらず読者が彼女に親しみを感じ、あるいは魅了されさえもするのはどうしたことなのだろうか。その一因として「語り」の巧妙な操作があげられるかもしれない。そしてそのような観点を反映した「注」が二、三の個所で試みられているが、「注」として適切かどうかは読者の判断を仰ぎたい。また今回は巻頭にオースティンを長く読んできた樋口氏の **Introductory Essay** が得られたことはこの巻の充実の一助としても得難いことであった。

どんな仕事も、敢えて言えば、訂正のための準備でしかないだろう。炯眼の読者には多くの不備な点や間違いなどが目に付くに違いない。そんな点に限らずいろんなご意見をお聞かせいただければ、われわれにとってこれ以上の幸いはないだろう。

本書の刊行は「関西大学研究成果出版補助金規程」によるものであるが、この研究成果をその規定に該当するものとしてお認め下さった同大学出版委員会の方々、並びに出版の実際面でいろいろとご迷惑をおかけしたにもかかわらず、ご協力を惜しまれなかった出版部の方々に心からの謝意を表したい。

1993年3月

多 田 敏 男

CONTENTS

	PAGE
はしがき	iii
TEXT について.....	vi
INTRODUCTION	vii
EMMA VOL. I.....	1
NOTES	183

TEXT について

現行の *Emma* のほとんどの版は、1816年の初版を校訂した R. W. Chapman の *The Oxford Illustrated Jane Austen* (1923) に基づいている。本書のテキストも上述の Chapman 版に Mary Lascelles が校訂を加えた版 (1966) と、それに依拠した James Kinsley 校訂の *The Oxford English Novels* の版 (1975) とに従っている。R. W. Chapman は初版について、「*Emma* のテキストは校訂者にほとんど困難を感じさせない。1816年の版は印刷も良好で、ほとんど校訂を要しない」¹⁾ と述べている。なお本書では、Jane Austen の特徴的な punctuation について、注に詳しく指摘しておいた。

1) R. W. Chapman, 'Introductory Note to *Emma*', *The Oxford Illustrated Jane Austen*, IV (London, 1988), xi.

INTRODUCTION

1

Emma は Jane Austen の生前に出版された作品としては最後のものである。作者自身の残したメモによると、1814年1月21日に書きはじめられ、翌1815年3月29日に書き終えられた。出版は同年12月であった。(ただしタイトルページには1816年の日付になっている。) 作者が *Emma* の執筆にとりかかったとき、すでに前年に *Sense and Sensibility* と *Pride and Prejudice* の再版が出ており、特に後者は1月に刊行されたものが11月に再版されるという成功を収めていた。さらに同じ1814年5月には *Mansfield Park* も出版された。

このような Jane Austen の作家としての経歴のなかに *Emma* を置いてみると、この小説が作者の創作意欲の高まりと自信のうちに生まれていることが分かる。*Mansfield Park* において、それまでの二十代の発想に多く依存した作品の方法から踏みだして、より成熟した視点をより洗練された技法によって展開する試みをおこなった作者は、ここではその経験を踏まえて、自己の生の基盤として何より愛する世界をより自由に描こうとしているかにみえる。

このころ Austen は、創作を試みていた姪に与えた批評において、よく知られている次のような言葉を残している。

You are now collecting your People delightfully, getting them exactly into such a spot as is the delight of my life; —3 or 4 Families in a Country Village is the very thing

「田舎の村の三、四家族」という言葉は、彼女の小説の世界の等質性と限界を示すものとしてよく引合いに出されてきた。しかし仔細にみると *Mansfield Park* はもちろん、他の作品も厳密な意味では必ずしもこの表現は当てはまらない。これは何より当時、創作の半ばにさしかかっていた *Emma* を念頭においての言葉であろう。

Emma の世界は、そのドラマのほとんどが *Highbury* の村の限られた家族の間で継起するという点で、社会階層の面でも地理の面でも、「田舎の村の三、四家族」という作者の条件にもっともよく合致しているのである。

こうした田舎の暮らしはどのような日常から成り立っていたのだろうか。*Highbury* の通りを歩き交う人びとを眺める *Emma Woodhouse* の眼は、その情景のなかに村の生活を見事に写し込んでいる。年下の友人と連立って *Highbury* の本通りへやってきた彼女は、連れが買物に手間どっているので、店の戸口から通りを眺めて時間を潰している。眼に入るものは見慣れた平凡なものばかりで、好奇心をそそるような珍しいことは何ひとつ起こりそうにない。しかし彼女は少しも退屈しない。今眼にしているものが生活の条件であり、毎日の営みとはそのようなものから成り立っていることを知っているからである。

...when her eyes fell only on the butcher with his tray,
a tidy old woman travelling homewards from shop with her
full basket, two curs quarelling over a dirty bone, and a

1) Letter to Anna Austen, 9 September 1814. *Jane Austen's Letters*, ed. R. W. Chapman (London, 1952), p. 401.

string of dawdling children round the baker's little bow-window eyeing the gingerbread, she knew she had no reason to complain, and was amused enough; quite enough still to stand at the door. A mind lively and at ease, can do with seeing nothing, and can see nothing that does not answer. (II, 9)²⁾

女主人公が眺めて飽きなかった世界こそ、作者が日常観察し、小説の世界を構築しようとしたものであった。Jane Austen 一家の生活を、書簡などの資料に基づいて考察した Oliver MacDonagh の最近の研究は、「Emma に描かれた社会環境や社会行動と、Austen 自身のものとの間に基本的な対応関係」³⁾をみて、小説に描かれた社会と現実の社会の一致を認めている。日常的な訪問、食事の招待、教会や慈善の会合など網の目のように張りめぐらされた交際を通して、「Chawton の社会の上層部はそれ自体ひとつの家族のようなもの」⁴⁾であったろうと推測している。

Jane Austen は *Emma* では、日常生活を通して知悉している現実から、その社会に流れる感情や思考の本質的なものを抽出しようとしたのではなかったろうか。ここには他の小説にはみられない主題の凝縮と描写の集中があって、より純粋な形で Austen 的世界が創りだされている。彼女が倦むことなく観察しつづけた「田舎の村の三、四家族」の世界が、牧歌的な魅力とそれと表裏をなす偏

2) 第 I 巻は本文の巻・章・ページを示し、第 II 巻以降については巻・章のみを示す。

3) Oliver MacDonagh, *Jane Austen: Real and Imagined Worlds* (New Haven, 1991), p. 142.

4) *Ibid.*, p. 143.

狭な地方性とを、ともにあざやかに描きだされているのである。

2

Emma の顕著な特徴は、それが地理的社会的にばかりでなく、心理的にも閉じられた自足した世界を描いている点にある。外部から来たものは、いずれも異質の闖入者として距離をおいて扱われている。親しみをこめて見守られるのは、Highbury に土着か、あるいはすでに根付いていると承認されているもので、彼らは「ひとつの家族」のように親密な関係を結んでいた。

Woodhouse 家はこのような社会の中心に位置し、Emma Woodhouse はその社会の価値を、典型的に身につけていた。彼女は 'handsome, clever, and rich, with a comfortable home and happy disposition' (I, 1, p.1) で、これ以上望めないほど恵まれた立場にいた。いわば幸福の条件の過剰が、彼女にとって問題となった。彼女のそのような立場は、当然自分の属する社会の思考や行動の基準を誇大視させることになり、そこに彼女の不幸の原因があった。

Jane Austen はこの女主人公があまり人に好まれまいだろうと考えていた、と甥の James Edward Austen-Leigh は次のように記している。

She was very fond of Emma, but did not reckon on her being a general favourite; for, when commencing that work, she said, 'I am going to take a heroine whom no one but myself will much like.'⁵⁾

5) James Edward Austen-Leigh, *Memoir of Jane Austen*. ed. R. W. Chapman (Oxford, 1951), p. 157.

Emma Woodhouse は、Elizabeth Bennet や Fanny Price のような ‘general favourite’ になりうる女主人公ではない、と作者は考えている。その理由はどこにあるのだろうか。もちろん彼女の性格的な欠点の問題があるだろう。だが、すべてを性格の責任に帰することはできない。なぜなら彼女の性格を形成してきたのは、自分の考え方や生き方が社会の正統な価値に支持されているという自信であったからだ。Emma はあまりに恵まれた境遇に生きているため、その境遇を肯定し支持する Highbury の村の体制とそれを支える価値を無批判に受け入れたが、そのような自己満足には危険な陥穽があった。

Jane Austen はこのような自己満足が人に好まれないことを知っていたし、それがあある意味では平穩無事な望ましい社会の反映であることをも知っていた。Emma にみられるパラドックスは、望ましい平穩な社会の価値を典型的に身に付けた女主人公が、そのすぐれた適応力故にかえって自分の立場を危うくし、幸福を失う危機に遭わねばならぬ点にある。

Emma は気紛れな思いつきから、protégée の Harriet Smith を村の牧師 Elton と結婚させようと画策する。しかし彼女の目論見はみごとに外れて、彼女の自尊心と Elton の野心のからみあう滑稽なドラマは、結局彼女の自尊心を傷つけただけで終わってしまう。彼女は自分の計画の愚かしさは棚にあげて、Elton の凶凶しい野心を厳しく糾弾する。

He must know that the Woodhouses had been settled for several generations at Hartfield, the younger branch of a very ancient family—and that the Eltons were nobody. (I, 16, p. 64)

Highbury の社会の秩序を考えれば、村一番の旧家の3万ポンドの財産をもつ令嬢を、牧師とはいえ‘nobody’の Elton がどうして厚顔に求婚などできるのか、と Emma は考える。彼女は Elton の卑屈で愚劣な振舞いは笑って見すごすことができたが、Highbury の社会の根幹をなす秩序を乱そうとする身の程しらずの野心は許すことができなかった。

Emma が二度目に Harriet との結婚を画策した Frank Churchill の場合は、事情はいささか複雑であった。Frank は現在 Yorkshire の伯父の家に養子として養われる身分とはいえ、Emma の親友で元家庭教師の Miss Taylor の嫁いだ Weston 氏の先妻の子供で、父親の自慢話を通じて、Highbury では自分たちの社会に属する人物とみんなから認められていたのである。Emma 自身も本気ではなかったものの、一時は自分の結婚相手にみだてて空想を楽しんだりするほどの存在であった。

Frank は永い延期の後、やっと姿をみせたとき、Highburyこそ自分の故郷と呼べる土地であると主張する。

He...professed himself to have always felt the sort of interest in the country which none but one's own country gives, and the greatest curiosity to visit it. (II, 5.)

機転のきく彼は、この閉ざされた社会に受け入れられるには、この土地に元来所属する人間だと主張する必要があることを見抜いたのである。Emma は彼の言葉に偽りの臭を嗅ぎつける。‘if it were a falsehood, it was a pleasant one, and pleasantly handled.’ (II, 5) 彼女は彼の愛想のよさ、好感もてる態度に惹かれて、彼の偽りの言葉、彼の演技を見過してもよいと考えたのである。

Highbury 中の賞賛のなかで、ただ一人 Frank Churchill を村への好ましからざる闖入者であると感じていたのは Knightley で

あった。それで、Frank の態度がうわべだけの人当たりのよさにすぎず、実際は利己的な演技であるときびしく批判する。

‘No, Emma, your amiable young man can be amiable only in French, not in English. He may be very “aimable,” have very good manners, and be very agreeable; but he can have no English delicacy towards the feelings of other people...’
(I, 18, p. 180)

彼の意識の底には、Emma を誘惑しているかにみえる Frank にたいする嫉妬の気持ちが働いていたかもしれない。しかし Knightley のように共同体における個人の責任について強い信念をもつ人間にとっては、Frank の不誠実な態度は、たんに Emma への裏切りだけでなく、Highbury の共同体を混乱させ危くするものとさえ映ったのである。

もう一人 Emma にとって、自分との関係が測りがたく、評価がむつかしかった人物に Jane Fairfax がいた。Jane はかつての村の牧師の未亡人 Mrs. Bates の孫で、Miss Bates の自慢の姪でもある上に、洗練された容姿と上品な物腰の娘で、現在は他人の家で世話になっている孤独な境涯という点からいっても、当然もっと Highbury の社会に溶け込んでよいはずであるが、彼女にはどことなく翳があって孤立した存在となっているのである。

Emma は Jane が優れた女性であることを認めながら、なぜか彼女に親しみを感ずることができない。

‘...she could never get acquainted with her; she did not know how it was, but there was such coldness—such apparent indifference whether she pleased or not—’ (II, 2)

Emma が感じとった Jane の冷淡さとよそよそしさとは、Highbury の人びとが共有する意識を拒否する身構えであった。彼女は Emma が空想していたような不倫の身ではなかったにしても、Frank Churchill と海辺の保養地でひそかに婚約していたのである。彼女は結局 Highbury の一員に本当になることはないままに、やがて Frank との婚約が明らかになって立ち去って行く。

このように Elton 牧師、Frank Churchill, Jane Fairfax ら外部からやって来たものは、多少とも闖入者であり、内部の人間にとつては疑わしい存在であった。Elton 夫妻のように無理に共同体のなかに入り込んできても、彼らは部外者として村の人びとの意識の周縁にとどまることになるだろう。

それは小説の結末での Emma と Knightley の結婚式にたいする Elton 夫妻の軽蔑がよく証明している。女主人公の結婚式は、美しく飾り立てる趣味のないつましい、(おそらく Highbury の良識ある) 多くの人びとの結婚式と変らないものであったが、都会の富の信仰を持ち込んだ Elton 夫人には憫笑をかけたのである。もちろん二人の幸福は、Elton 夫妻の軽蔑とはかかわりなく、Highbury の真の友人たちの仕合せへの願いによって確認される。

3

Emma があれほど強い帰属意識をもっていた社会はどのようなものだろうか。Highbury は London の南西16マイルばかりのところにある、ほとんど町といってもいいほどの村で、Oliver MacDonagh は人口千人ばかりであったろうと推測している⁶⁾。ここは Woodhouse 家を社会階層の頂点として、社会が構成されていた。

6) MacDonagh, p. 130.

まず Emma が ‘the regular and best families’ (II, 7) とみなしている Weston 夫妻や、Highbury から1マイルばかり離れた Donwell Abbey に住む義兄の Knightley が、Woodhouse 父娘とともに村の支配階層を形成していた。しかし最近では Cole 一家も Woodhouse 一家につぐものとして重きをなしてきていた。数年前にはごくつましく暮らしていた彼らも、二、三年前から London での事業が順調で、財産を増やし、屋敷も建増し召使いも増やして、いまや Woodhouse 家と対等に交際しようとしているかのようになり、舞踏会の案内状を送りつけて Emma を怒らせる。

次には Harriet に結婚を申し込んだ yeoman の Robert Martin がいる。Emma の snobbery と偏見とがもっとも露骨に現われるのは、Martin を相手としては不足と考えて、Harriet に婚約を無理に解消させたときであった。しかし yeomanryこそ gentleman の階層に上昇途上にある、村の中核ともいべき存在であった⁷⁾。じじつ Knightley は Martin を ‘a respectable, intelligent gentleman-farmer’ (I, 8, p. 100) と呼んで、友人として尊敬しているのである。

Emma の Martin にたいする偏見は、自己中心的な思考に養われた視点の限界を示すものであったが、それがもっと個人的でより深い意味をもって現われたのが、Miss Bates にたいしてであった。Miss Bates は不思議な存在で、気の好いおしゃべりで誰からも憎まれていない無害な人物というだけでなく、Highbury の社会の風景では欠かせない重みをもった存在であった。父がかつて村の牧師であったというだけの資格で、Woodhouse 一家らの領分にも自由に顔を出していた。

Emma は日頃から Miss Bates の冗舌を疎ましく思っていたが、

7) Lionel Trilling, *Beyond Culture* (New York, 1965), p. 41.

そこにはこの独身の貧しく無力な女性を軽蔑する気持ちが潜んでいたことは否めない。彼女は Box Hill へのピクニックで、Frank にたいする不満の気分の捌け口として、Miss Bates の冗舌癖を面と向かって侮辱する。

このとき初めて、彼女は自分の行為がいかに深刻な社会的意味をもっていたか、という事実を突きつけられる。この場面を目撃した Knightley は、Emma の無礼をきびしく咎めて Highbury の社会で Miss Bates のもつ意味を指摘した。

‘Were she your equal in situation—but, Emma, consider how far this is from being the case. She is poor; she has sunk from the comforts she was born to; and, if she live to old age, must probably sink more. Her situation should secure your compassion.’ (III, 7)

Knightley の言葉には、Highbury の階層社会にたいするより深い理解と、そこから生まれてくる人びとへの暖かい眼差しがある。一見平穏で安定しているかにみえる社会も、静かに動きつつあった。Cole 一家のように社会の上層にしっかり根付くことのできるものもあれば、Bates 母娘のように昔の身分をじよじよに失っていくものもある。Emma の狭く単純な価値観では、個人と社会の複雑な関係を捉えることも、社会的存在としての人間の生の意味を理解することもできないだろう。

さらに Miss Bates は、女の生き方の問題も Emma に提起した。Harriet Smith の結婚の仲介に努める Emma は、結婚が女性の一生にもつ大きな意味を充分認識していた。立派な間違いのない結婚が、女性にとって身分を安定させ社会的に尊敬される道である。もし女が結婚せず貧乏であればどうなるだろうか。

‘...it is poverty only which makes celibacy contemptible to a generous public! A single woman, with a very narrow income, must be a ridiculous, disagreeable, old maid!’ (I, 10, p. 102)

これは Miss Bates を念頭においての発言であるが、未婚女性の身分の不安定さと不面目を如実に物語っている。Jane Fairfax がもし Frank Churchill と結婚することがなかったなら、その将来は Miss Bates と似たものになったことだろう。

Emma のこの未婚女性の身分についての他人事のような発言は、彼女の人生経験の不足とそれに相応しい粗雑な現実認識を示している。しかし Harriet の結婚の干渉の失敗をめぐるさまざまな経験や Miss Bates らとの切実な関わり、そして何よりも Knightley への愛の目覚めを通して、Emma は人間的に成長し、社会の支配階層の身分に相応しい成熟した女性に育っていくことが暗示されて小説は終わっている。

恵まれすぎた環境に生きる女主人公は、現状肯定、現状維持的になり、ひいては自己中心の考えに傾いていくが、結局は Highbury が緊密に結びついた網の目の共同体であり、そこでは軽蔑すべき無用の人はいないことに気付く。老人も病人も貧しい人も社会のそれぞれの場において充実した生が必要であり、彼らを支えてゆくことが彼女のように共同体の頂点に居る人間にとって義務であることを悟ったのである。

Highbury は Emma がそう考えるに足るだけの、のどかで平和な村であった。唯一発生した犯罪は、近くの養禽小屋がひんぴんと荒されて七面鳥が盗まれたことであった。この泥棒は Woodhouse 氏にこそ押込み強盗にも匹敵するショックを与えたけれども、じっさいは Emma と Knightley の結婚を促進する役割を果たしただけであった。

Mr. Woodhouse といえば、自分の健康はもちろん、他人の健康についての細かい気遣いでうるさがられながら、また Miss Bates は冗舌の奔流で退屈されながら、それぞれ平和に生きてゆくことだろう。

このような無事で悠悠とした牧歌的な村の生活は、早晚失われざるをえない。Jane Austen はすでに *Mansfield Park* で、田舎の大地主一家の伝統的な価値が危殆に瀕する事態を追求していたし、遺作となった次作の *Persuasion* では、女主人公が古い伝統的な地主の生活の枠を出て、海軍の職業軍人との結婚というまったく新しい生き方を求める姿を描いている。

しかし *Emma* の世界は、Jane Austen にとってもっとも心に適った世界の投影であった。彼女はその社会が内包する偏狭な視野、自己満足といった弱点に気付きながらも、人びとの強い連帯感や、弱者にも平和な生活を保障する安定感を保ちつづける共同体の魅力を、美しく才気煥発な女主人公の生き方を通じて小説のなかでいきいきと描いているのである。

(樋口欣三)